

今回のような大雪は初めて。雪捨て場に困っている 高齢者世帯のなかには除雪しきれない民家も

2月7日、牧区、板倉区を中心に豪雪地帯を視察してきました。

牧区では渡辺靖子旧牧村議から案内してもらい、大規模な稲作経営をされている農家や高齢者世帯などを訪問し、雪とのたたかいの状況などを聞き取りました。

最初に訪ねた農家は山間部で熱心に稲作経営をされています。「今回のような大雪は初めてだ。雪の捨て場に困っている」と訴えられました。あまりにも大雪なので、民家や農業用施設の周囲は雪の山となっていました。今後さらに雪が降り積もった場合、何らかの排雪支援を考えていく必要があると見てきました。

このお宅では、除雪の話だけでなく、TP（環太平洋経済連携協定）関連の動きについて

でも話になり、「我々の知らないところでどんどん進められているのではないか」との声も寄せられました。

77歳と78歳の夫婦だけで暮らしているお宅では、除雪作業のたいへんさをよく知ることができました。ここでも、「長年住んでいるが、雪の多さはこれまでで一番だ。雪を捨てる場所がなくて困っている」と訴えられました。

板倉区は、鈴木昭司旧板倉町議から案内していただき、寺野地区で視察をさせてもらいました。あちこちで屋根の雪下ろしや家のまわりの除雪をしている人たちがいました。要援護世帯では、「業者の方などから雪掘りをしてもらい、やっと家の中に光が入ってきた。助かった」という声がありました。しかし、支援対象



屋根の上で経営者から話を聞く私



スノーダンプとピーターでの除雪作業

になっっていない世帯で、1階の出入り口の除雪が間に合わず、2階から出入りされている方もありました。もし、火事でも起きたらどうなるかと心配になりました。こういうところへも支援があつて当然だと思えます。

神社の除雪をされている地域の人たちとも会い、話をすることができました。そこでは、「災害救助法が適用されたと



【手づくりコンニャク】板倉区機織のあるお宅で除雪支援の実態についてお聞きしている時に、出していただいたお母さんの手づくりコンニャク。カツオ節をかけてご馳走になりました。良い味でした。後ろの方の黒いものはゼンマイの煮しめ。これもうまかった。

一つ間違えば炉心溶融の苛酷事故に至る寸前だった

にいがた自治体研究所がこのほど『恐るべき柏崎刈羽原発の危うさ』というブックレットを発売しました。

本書は、2007年7月の中越沖地震で柏崎刈羽原発がどのような被害を受け、そこから何を学ぶべきだったのかを明らかにしています。実は「一つ間違えば炉心溶融の苛酷事故に至る寸前」の恐ろしい状況だったのです。1冊700円です。ご希望の方は橋爪まで連絡を。

新潟県政ブックレット 1 原発問題

恐るべき 柏崎刈羽原発の危うさ

にいがた自治体研究所 編

「原発ゼロ」の願いに背く泉田県政

執筆者
関根 征士 (新潟大学名誉教授)
小林 昭三 (新潟大学名誉教授)
立石 雅昭 (新潟大学名誉教授)

インタビュー
野中 昌法 (新潟大学農学部教授)
清水 修二 (福島大学副学長)

橋爪のりかずの
市政レポート

NO 1540
2012.2.12

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪法一
Tel 025-548-3628 (有線) 4867
E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp
URL http://www.hose1.jp/

杉林の近くにある大きな木。何本もの枝を横に大きく広げ、紅色の花が上から下へと一つまたひとつと毎日のように咲いていく。まだ一度も見ることがないのに、その木のイメージがどんどん膨らんでいきます。

木は上越市牧区今清水にある雪椿です。豪雪の実態調査でNさん宅を訪問したときに初めてこの木のことを知りました。茶の間でNさんは言いました。

「なんて言ったって新潟県で一番だと言うすけね。(枝まで含めると)直径が一五メートルくらいはあるかな。冬、雪で押さえつけられて寝ていたのが、春になるとびんと起きるんだわ。木はしなやかで折れない。春になれば雪解けが進み、先に雪が消えた上の方から下へと順番に咲いていき、いっぱいになるんだ」

話を聞いていて、「雪に押さえつけられていても、しなやかで折れない」というところが私の心に強く響きました。そして、花がいっぱいになる姿はどんなものなのかと思いました。

Nさんの住んでいるところでは、今冬は四メートルを超える大雪で、どかしきれないほど降りました。雪とたたかうなかで楽しみなのはお茶飲みです。コンニャクを作ったら、それを持って近所へお茶飲みに行き、世間話をする。そういう人がNさんのまわりには二人もおられるとか。Nさんは人から自分の家に来てもらうのがとてもうれしいといっています。私と案内役をしてくださったWさんの二人で訪ねたときも、「さあさ、入って」と大歓迎でした。

私たちが入らせていた前にも近所からのお客さんがありました。その方が帰られた後は、茶の間に私たち二人とNさん夫婦の四人だけとなりました。薪ストーブがあるものの、スス掃除がたいへんとかで、その日、使っていたのは石油ストーブのみでしたが、茶の間はとても暖かでした。

七八歳のNさんの話もまた温かいものでした。Nさんは一月一五日に腰を痛め、近所の人やケアマネージャーさんなどいろんな人に助けてもらったといっています。酒を買ってきてもらったとか、惣菜をたべさせてもらったなどの話はじつにユーモアたっぷりでした。近所でお茶飲みをして、惣菜が出たら、家で食べないでいいようにたくさん食べさせてもらおうという話には大笑いしてしまいました。

人が訪ねてきたら歓迎するという気持ちを持っているのはNさんのお連れ合いも同じです。お連れ合いは最初、テーブルのそばで背中を曲げたまま固まっていたように見えました。一言もしゃべらず、まったく動かないでいたからです。ところが、私たちの会話をじつと聴いておられたのですね。「しゃべっていると口がザラザラしてくる」そう言うと、手助けをしたくなるほどゆっくりと時間をかけて立ち上がり、台所へ行かれたのです。そして、大きなコーヒーカップをテーブルの上に出してくださいました。

Nさんをはじめ集落の人たちは地域を元気にしたいと昨年、初めて雪椿まつりを実施しました。自慢の雪椿の花がたくさん咲くなかで、フキノトウ、ウドなど山菜料理を楽しんだといえます。高齢化が急速に進んでいる中での取組みに驚きました。

話を聞きながら、ふと思いました。「雪に押さえつけられていても、しなやかで折れない」というのは雪椿だけではなく、そこに住む人たちもそうだと。雪椿が咲いて見ごろとなるのは五月の連休明けだそうです。どんな花を咲かせるのか見てみたい。

住宅リフォーム促進事業

新年度も継続を 上越建築組合連合会も要望

同制度の継続要望は日本共産党議員団も新年度予算の中で行っています。ぜひ継続してほしいものです。

落語も登場し、楽しい集いに

恒例となった日本共産党の「新春の集い」。今回は第一部で豪雪被害や原子力災害対策などについて私や日本共産党中央委員会の藤野やすふみさんが報告、その後は懇親会でした。

懇親会での出し物は今回も盛りだくさんでした。小田順子さんの朗読は杉みき子さんの『小さな雪の町の物語』から「おばあちゃんの雪段」です。今の時期にぴったりの話ですが、子ども時代に尾神岳のふもとで雪段づくり、道つけをしてきた小田さんならではの朗読でした。また、仙田幸造さんがふるさとの民話、「猿地蔵」を、レルヒ亭久美喜さん(写真)が古典落語の

「初天神」を口演しました。レルヒ亭久美喜さんの口演は、最近、落語を始めたばかりとは思えない上手さがあり、びっくりしました。



日本共産党議員団などの提案が実を結び、一昨年の秋以降、3回にわたって取り組まれた上越市の住宅リフォーム促進事業は大変好評で、地域経済を活性化するう

えで大きな役割を果たしました。

新年度予算編成が大詰めを迎えている中で、このほど上越建築組合連合会(富永武司会長)が市長や議長にこの事業を新年度も継続するよう訴えた要望書を提出しました。

要望書では、「地域の関連業者も経済危機の下、通算3回行われた事業にいろいろ知恵を出し合い、集客に努めてまいりました。さらに地域社会に制度の浸透と、地元の住宅リフォーム産業が経済効果を上げられるように制度の継続を」と書かれています。